〔研究ノート〕

感情と理性の起源
——真理と価値の起源に関する一考察——

岡部　勉

On the Roots of Emotion and Reason
——Remarks on the Origins of Truth and Value——

Tsutomu　Okabe

要旨

人間に固有の人間的な能力というものは、大脳皮質のような特定の身体的な部位に、実現される可能性の全体が予め描き込まれているというようなものではない。例えば言語能力の基礎的な部分は、或る仕方では大脳皮質に書き込まれていると言えようが、人間の言語能力が具体的に実現されるときには、日本語とか英語を話す能力として実現される。人間の場合には、日本語とか英語のような、それ自体は文化的構築物であって、直接的に身体の延長上にあるものではないが、身体的能力の或る種の拡張としての文化的構築物、そういうものが決定的な意味を持つ。以下の考察は、感情と理性の起源について想像してみることによって、人間性の起源という話が一体どのようなものになるかを素描してみようとするものである。なぜ感情と理性かというと、人間にしか生じないと思われる意志の弱さというものが、感情と理性を主役とするものであるように思われるからである。

キーワード　人間性、感情、理性、真理、価値

序

1　仮に私たち現生人類は、感情と理性という二つの特異な能力を、例えばブタの嗅覚のように、あるいはコウモリの聴覚のように、高度に発達させてきたというのが本当だとしてみよう。異様に高度に、と言うべきかも知れない。異様かどうかは別にして、私たちはそれによって、つまり、この二つの能力を高度に発達させることによって、人間になったのであろうか。だが、もっと適切な、別の言い方があるかも知れない。例えば、言語とか芸術の能

力としての象徴能力というものを発達させることによってであるとか、あるいは複雑な社会を構成する能力を発達させることによってであるとか。しかし実際のところ、これらは同じことを別の仕方で言っているだけなのかも知れない。正確にはどう言えばよいのか、私にはよくわからない。

ところで、進化の順序からすると、感情が先で理性が後であろう。確かに、どの段階からであるにせよ、人類はこの二つの能力を高度に発達させてきたと言えよう。人類登場以前のいつから感情はあったのかよくわからないが、定説に従って初期哺乳類からとしておこう。そのとき既に萌芽的には理性もあったのだというようなことは、恐らくは誰も言わないであろう。「理性」というような少々「胡散臭い」（そう思う人もいるであろう）語を誰もが同じように理解しているとは私は思わないが、理解の幅は相当なものであるにしても、それでも、初期哺乳類の段階で既に理性は芽生えつつあったというようなことは、誰も言わないであろう。「知性」なら鳥でも持ってると或る人は言うかも知れない。それならタコでも持っていると別の人は言うであろう。私は、知性と理性のどこがどう違うのかというような話をここでしたいとは思わないが、一般に人は、理性の方が知性よりは幾らか高級な能力で、人間以上でないとそれは持つことができないと思っているのではないであろうか。

理性に比べると、感情というようなものは、下等なもの、制御あるいは抑制しなくてはならないもの、支配されるべきもの、それによって支配されてはならないものとされてきたと言えよう。今日、このような考え方は見直されつつある。感情の仕組みは合理的なものであると言われるようになった。人間の感情は他の動物のそれと違って極めて高級なものであると言われることもある。芸術感情とか、宗教感情とか。感情についてのこれまでの考え方は、全面的に訂正される必要があるとされる。私はそれを否定しないが、どう訂正されるべきかについては、少し思うところがある。

2　それが何であれ、人間の、人間に固有の、人間的な能力というものは、例えば大脳皮質のような身体的な部位に、実現される可能性の全体が予め描き込まれているというようなものではないと思われる。例えば、言語能力の

基礎的な部分（それは確定されてはいないが、そういう部分はあるであろう）は、或る仕方で大脳皮質に書き込まれていると言えようが、人間の言語能力が具体的に実現されるためには、あるいは日本語を話す能力として、あるいは英語を話す能力として、それは実現される。人間の場合には、大脳皮質のような身体という可能性あるいは能力というのは、そういう実際に実現される具体的な能力の、その前提になる基礎的能力に過ぎない。日本語とか英語というような、それ自体は文化的構築物であって、直接的に身体の延長上にあるものではないが、遺伝的・生理的機構を利用した、身体的能力の或る種の拡張としての文化的構築物、そういうものが人間の場合には決定的な意味を持つ。

感情というものについても、言語と言語以外の文化的機構に依存する部分がある（少なからずある）と言える分だけ、言語と同じように考えてよいと思われる。感情に関わる基本的な能力というものは、遺伝的・生理的機構としてヒトに備わっていると言えよう。しかしそのような能力は、何らか教育されることによって文化的に変容を遂げるのでなければ、結局は動物と同じ水準にあると考えられる、原始的な「叫び声」とか「唸り声」として発現するものでしかないであろう。

生物種としてのヒトというものは、そういう意味では、或る仕方で変容して別の存在になるのでなければ、人間にはなれないと言うべきであろう。それは、例えばP.Griceの言い方を借りて、何か「実体の変容」に近いものが「ヒト」と「人間」の間にはあると言わなければならないのかも知れない。この変容は、文字通りの意味での変容、文字通りの意味での実体の、実体としての変容であって、比喩的な意味でのそれではない。Griceもそういう意味で言っていたと思われる。しかし、本当にそういう変容が私たちひとりひとりに生じると言えるのであろうか[註1]。

この場合、別の存在になるのに本当に必要なのは、自然的なプロセスではない。正確に言えば、自然的かつ内部的なプロセスを通して私たちはヒトから人間になるのではない。もちろん、それは例えば、ヒトに外部から何かウィルスのようなものが忍び込んで、そのウィルスもどきの働きでヒトは人間になるというようなプロセスではない。しかし、単純に人工的なプロセスを通

してであるとも言えないように思われる。そのプロセスは、いつどのようにはじめてもよい、そしてどのように進行してもよいというようなものではないと思われるからである。それは、一言で言えば、内部的なプロセス（身体の成長・発達）に合わせて、外部的なプロセス（教育・養育）が進行するというかたちをとる。外部的なプロセスの進行が遅滞すると取り返しがつかなくなる。

自然言語は明らかに身体的能力の拡張である。最も単純には、私たちの言語は基本的には音声だからである。だが、単純にそれだけではなくて、私たちの言語能力というものは私たちに一定の身体的条件が整うことによって備わるものであると言えるように思われるからである。しかし他方で、言語というものは、或る意味では完全に私たちの外部にあると言える。なぜなら、それは学ばれるものであるが、私たちが言語を学ぶときに学ばれる一切のものは、基本的には私たちの外部にあると言えるように思われるからである。感情についても同じように言えるのではないか。

そうだとすると、ヒトから人間になる変容というのは奇妙なものである。それはあたかも、進化のプロセスを継続するために、身体内部の遺伝子的な記憶の仕組みを利用するだけでは足りなくて、外部の文化的な記憶の仕組みとでも言うべきものをも利用しなければならなくなったかのようである。人間というのは、本当にそのような、奇妙な存在なのであろうか。

3　以下の考察は、感情と理性の起源について想像してみることによって、人間の起源という話が一体どのようなものになるかを、試みに素描してみようとするものである。なぜ感情と理性かというと、人間にしか生じないと思われるアクラシア（意志の弱さ）というものが、感情と理性を主役とするものであるように思われるからである。しかし、ここで私はアクラシアについて議論したいのではない。そうではなくて、アクラシアというような奇妙な経験をすることになった人間の成り立ちというものについて、もう一度考え直してみたいと思うのである。

Ⅰ．感情の起源

1　私たちは、カサゴやカエルといった魚類とか両生類のような生物の反応と人間の行為の間にも、はっきりと連続性があることを認めないわけにはいかない。しかしもちろん、人間と他の動物との間には、進化上の連続だけがあるのではなくて、種の違いとしての不連続もある。その連続と不連続は、基本的には、行動と振る舞いの連続と不連続として考えることができる。形態上の違いというものは、そのような行動の違いを反映するものでしかないと言えよう。動物の身体的な組成あるいは身体そのものというのは、そのような行動の能力を表わすものあるいは行動の能力・行動の可能性そのものである。

そのような生物の能力、例えばツバメの巣を作る能力とかエサを捕る能力というのは、一定の環境・一定の状況に対応可能な、一般的な行動能力、一般的な仕方で規定あるいは限定されている能力・可能性である。もちろん、場合によっては強く限定されているが、一定の応用範囲というものはある。しかし、実は応用範囲があるように見えるだけかも知れない。一般的な仕方で限定されているだけだから、同じようなもの（同じように見えるもの）に対しては同じような仕方で反応する以外にないからである。この場合、感覚機構と運動機構は、比較的単純な仕方で（短絡的に）連合しているのであってよい。例えば、カエルが「間違いを犯す」「間違って異物を飲み込む」のは、エサを捕る能力が同じようなものに対しては同じように反応する一般的な能力として設定されているからであると考えられる。カエルの感覚機構と運動機構の間に複雑な連合野は必要ないであろう。

人間の場合には、カエルとは違って、感覚機構と運動機構の間に極めて複雑な大脳組織としての連合野が形成されていて、行動の仕方が、刺激に対する反応というのとはかなり次元の異なったものになっていると言えよう。私たちの場合は、カエルのように行動能力が一般的な仕方で強く限定されているということがないからである。もっと個別的な仕方で、ひとつの言い方では「反応ではなくて行為として」、私たちの行動能力は実現されるのである。カエルと私たちの間にあるのは、程度の差ではなくて、もっと根本的な違いである。それは、本能的な行動と人間の行為との、質的な違いである。

2　ここで、初期の感情的な能力について考えてみよう。原始哺乳類の感情的能力は本能的な能力の延長上に、本能的な能力を利用あるいは応用するような仕方で、出現したと考えることができる。しかし、本能的な行動が多様化したというのではない。本能的な行動様式とは別の行動様式、別の次元の行動様式が出現したということである。原始哺乳類に必要であったのは、実行中の本能的行動を停止するあるいは本能的行動から退却するための一般的な能力であったと考えてみよう。状況の一定の変化に対して、それを知覚したときに一般的な仕方でそれに対応する能力、そういう能力があるのとないのとでは、ずいぶん話が違ってくると思われる。音とか匂いがするというような、そういう身近な、自分の周囲に生じる一定の変化に対応して、全身を緊張させて一切の動きを止める能力、そういう能力が備わりさえすれば、場合によっては個体の生命が救われる確率は増えるかも知れない。最初に生じたのはこのような能力ではなかったかと思われる。

ところで、このような能力を有効に機能させるためのひとつのやり方としては、それと或る種の学習能力（例えば、単純な記憶能力）とを組み合わせるというやり方が考えられよう。最初からそうなっていたとは思わないが（最初は単純な、反射的な反応に近いものであったかも知れない）、いつの時点からか、記憶する能力との組み合わせが生じたと考えられる。もちろん、反復によって強化されるというような、連合的な記憶の仕組みというものは、このときはじめて生じたのではなくて、もともとあったものであろう。次に何が起こるかを予測する能力というようなものも、このような単純な記憶能力の延長上に想定できるかも知れない。だがそれは、予測する能力とは言っても、まだ「未来」というような概念とは無縁の何かである。そしてまた、想像する能力というようなものとも無縁のものであろう。未来とか想像ということからは遠く離れた、はるか手前にある原初的な学習能力ではあっても、それと新しい行動能力の組み合わせは、個体の生存にとって決定的な意味を持つものであったかも知れない。

しかし、そのような組み合わせとしての「総合的」な能力も、個体の生存に関わる限りのものとしては、それほど複雑なものである必要はないであろう。個体間の関係（反発と融和・協調）が問題になる段階になっても、十分

複雑とは言えないと思われる。だが、集団の維持が問題になる段階、更には集団間の関係が問題になる段階ということになれば、話は全く別であろう。

3　一般に儀式とか儀礼は、集団の維持（秩序の維持）と集団間の関係が問題になる度合いに応じて発達すると考えられる。集団の内部に生じる災い、過ち、凶事、これらによる近親者の死、これらに対する怒り、憤り、恨み、悲しみ、そして復讐、償い、赦し。これらすべてを制度的に処理する必要がある。そうでなければ、集団あるいは集団間の関係は維持できないであろう。逆に、感情が発達しなければ、そもそも集団を形成することすらできないであろう。個体を集団に帰属させる力、集団の秩序を維持する力、感情に先ず求められるのはそういったものであろう。感情の発達と儀式とか儀礼の発達とは、恐らくは同時進行であると考えられる。マウンテンゴリラの集団のような比較的小さい集団を維持していくためには、儀式とか儀礼までは必要ないのかもしれない。ネアンデルタール人の集団がどの程度のものであったにせよ、彼らには儀式や儀礼の類いは必要なかったというのがもし本当だとすれば、そしてまた彼らには集団間の交流がほとんど存在しなかったというのが本当だとすれば、もしかすると、単に（小）集団を維持するためだけなら、儀式や儀礼の発達とか感情の発達とかはそれほど必要ないのかも知れない。

シンボル（象徴）というものを複雑な仕方で使用する能力というようなものは現生人類になってはじめて登場したと考えられている。シンボルを使用できなければ、儀式とか儀礼は発達しないであろう。自然言語は複雑なシンボルを代表するようなものであると考えられる。そうだとすると、シンボルを使用する能力としての言語能力というものはもともと（現生人類以前にも）あったと考えるのが普通だから、現生人類はシンボルを使用する能力を飛躍的に発達させることによって現生人類（人間）になったということになる。

「飛躍的に」とはどの程度のことを言うのであろうか。あるいは、程度のことを言うのではなくて、質の違いのようなことを言うのであろうか。ひとつ考えられるのは、ものと記号ではなくて、記号と記号の関係を処理する能力の発達というようなことである。ものと記号の関係、行動と合図の関係については、連合的な記憶能力を用いることによって、例えばイヌとかイルカ

であれば相当のところまで「理解」することができるようになる。つまり、記号をものに、あるいは合図を行動に結びつけるというようなことができるようになる。しかし、「隣の部屋の赤い果物をこの部屋の若い女性の客に持ってくる」というようなことになると、場合によっては有名なボノボのカンジとか人間の（4歳位の）子供にすらできない、あるいは困難であるのかも知れない。しかし、何ができない、あるいは何が困難であると言うべきであるのか。

簡単に言うと、子供は多分（複雑すぎて）記号の処理がうまくできないのである。大人が特に困難を感じないのは、特別な記号処理能力を持っているからである。それは、大人が普通に持っている能力だから、何も特別なものではないとも言えるのだが、どのような能力であるかを言おうとすると、ひどく難しいという点では、やはり特別なものであると言わざるを得ない。はっきりしているのは、連合的な記憶能力を当てにするだけでは、そのような処理能力を獲得することはとうていできないということくらいであろう。言語的な能力というのは或る種の記憶能力であると思うが、連合的なそれとは全く別種のものであろう。しかし、ここではこれ以上、この問題に深入りしたくはない。

ところで、言語能力以外の象徴能力としての芸術（芸術的諸能力）について、なぜ人間だけがこのような象徴能力としての芸術というものを持ち得るのか、少し考えてみよう。芸術的諸能力というものは、一部の考古学者だけが強くそう主張しているのかも知れないが、現生人類だけが持つとされる。もしそれが本当だとすると、芸術的象徴能力の発達は感情的諸能力の発達と、少なくとも同時期であったということになるし、単にそれだけではなくて、恐らくはこれら二つの能力の発達は不可分のものであったということになるのではないかと思われる。現生人類の初期の段階でも、現在と同じように、芸術的諸能力というのは儀式の際に最も力強く発揮されるものであったかも知れない。それは人々を強く惹きつける。芸術が人間（現生人類）だけのものであるのは、それはシンボルを使用する能力を持つ者に、感情的諸能力の発達と共に生じるものだからであると思われる。感情の発達は、複雑な社会の形成（集団間の複雑な関係の構築）と、恐らくは同時進行であったと考え

られる。だから、もし以上のように考えるのが大筋で正しいとすれば、芸術も感情も、本来は優れて社会的なものであるということになる。

4　しかし、感情は個人的・主観的なものであるとされる。感情が働くのは何よりも先ず個人においてだからであり、客観的な事実に基づくものではなくて、主観的な思いこみに基づくものだからである。だが、思いこみは訂正され得るし、訂正された場合には、元の感情は消滅し得る。他方で、感情は共有され得るものである。共有され得ない感情というものは、基本的にはないと思われる。怒りや恨みは、比較的容易に共有されて、後々まで残るから、これを鎮めるための儀式（祭礼）とか制度とか（司法制度）が必要になる。

ところで、感情は個別化された特定の対象（例えば特定の個人）あるいは個別化された特定の出来事（過去の出来事）に向かう傾きを強く持つように思われる。しかし、これは必ずしも、類人猿と人類の長い歴史において感情はそのような方向に向かって徐々に進化してきた結果であるということではないと思われる。確かに、人間において感情は明らかにそのような志向性を持つ。感情がそのようなものであるというのは、言語の発達（指示表現及び過去時制の発達）が、個体を指示するとか個別の出来事を特定する（そしてそれを記憶する）といったことを、どの時点からであるにせよ、或る時点から可能にしたからである。あるいは、社会生活における感情の役割が言語の発達をそのような方向に導いたのかも知れない。いずれにしても、個体あるいは個別の集団を指示するとか個々の出来事を記憶するといったことができるようになるためには、言語が既に或る程度（どの程度であれ）発達していなければならないであろう。

しかし、感情ははじめから個別の対象と個別の出来事に執着するようにできていたとは思われない。Aが以前Bによってされた仕打ちをいつまでも忘れないというのは、特にAが執念深いということを示すものではなくて、ごく当たり前のことであるかも知れない。だが、時がたてば忘れてしまうというのも、ごく自然なことである。あるいはAは、何度も思い出すことによってBに対する憎悪を深めていくかも知れない。だが、（同じことを繰り返される危険性があるから、警戒するという意味で）忘れないように努めながら

も、過度に憎悪を深めるようなことはしないということもできる。どうするかは、最終的には私たちが決めることである。

Ⅱ．理性の起源

1　過度に憎悪を深めるようなことはしない方がよいという判断は、極めて理性的な判断であると言われよう。次に、このような判断の起源について考えてみよう。

言語は既に或る程度発達しているが、本能的な行動と感情的な行動だけが可能であるというような段階があったと仮定してみよう。実際には、こういう段階は存在しなかったと考えるべきであろうが、こういう想定をしてみると、何が問題であるのかがはっきりしてくるように思われる。そもそも言語は偶然の産物であったと言われる。人類が二足歩行をするようになって、立ち上がったから喉の構造が変化して音が出せるようになった。それが言語のはじまりであるとされる。しかし、これはずいぶん省略された言い方であって、本当はどのようにして音声がシンボルになったかを言わなければならない。ここではそれは素通りして、言語は既に相当の段階に達しているものとする。それでも理性というようなものはまだ登場してこないと言えるように思われる。

もし本当に本能的な行動と感情的な行動だけが可能であるとすると、特にこれからすることについて、理由を説明するというような、面倒なことはする必要がないと思われる。過去にしたことについても、理由を述べて正当化するというようなことをする必要はないであろう。「必要がない」というよりは「余地がない」と言うべきかも知れない。というのも、考える余地というか、考えることによって別の可能性（別のことをする可能性）が開かれてくる余地というものが、そもそもそこにはないからである。適切に、あるいは不適切に、状況を読みとるということと、適切に、あるいは不適切に、関連する過去を思い出すということだけがそこでは問題である。不適切にであれば、恐らくは問題が生じるであろう。しかし、問題が生じたとしても、そこでは本能的ないし感情的行動によって（最も簡単なやり方としては、例えば別の個体の感情的行動によって）それを処理することができるだけである。

全く別の仕方で、しかも個体内部でそれに対処する（本当はそれが問題である）ということが、感情的な行動の延長上に考えることができるであろうか。例えば、感情的な行動を途中で中止する、中止して別のことをするようにさせるような仕組みというものを、感情の仕組みそのものを利用してつくるというようなことである。（フロイトなら別の想定をするであろうが、私はこの方がまだ現実的であると思う。）そのような仕組みは、感情的な行動から何が結果するかを想像する能力、あるいは未来の結果がどうなるかを前もって見てしまう能力というようなものを発達させることによって、もしかすると可能になるかも知れない。前もって（悪い）結果が見えてしまえば、それを中止して別のことをするということもあるのではないか。しかしながら、このような仕組みというものは、全く働かないということはないと思うが、有効に働くかどうかが大いに疑わしい。なぜなら、特定の感情的な行動を開始する条件が整っているときに、このような仕組みが働くかどうかが問題なのであるが、そのようなときに想像力というものが有効に働くかどうかがそもそも疑わしいからである。感情的な行動が今まさにはじまろうとしているときに、それを止めることができるような、それほど強いインパクトを持つ像を思い浮かべるということは、不可能であるとは思わないが、何か特別な出来事・経験がそれ以前にないと、そういう像を持つことがそもそもないであろうと思われる。稀にそういうこともあるとは思うが、一般的にあるとは言えないであろうと思われる。

それにしても、仮に以上のような仕組みを人類が或る時点で実際に持つようになったとしても、その段階で人類は理性を持つようになったとは言えないであろう。（アクラシアを経験するようになったとも言えないであろう。）理性を持つと言えるようになるのは、目的というものを持つと同時に目的を実現する計画性というものを持つ、そういう存在になったときであろう。だから、はっきりとした仕方で未来というものを処理できるようになっているというのが、先ず第一条件であろう。だが、それだけでは不十分であると思われる。

2　目的を実現する能力としての計画性というのは、人間に（進化の上では

比較的最近になって）備わるようになった総合的な能力であると思われる。それは、理由に基づいて推論する能力を含むであろう。また、未来を想像する能力だけではなくて、過去の出来事を一般化する能力を含むものであろう。更には、感情的な行動を制御する能力を含むものであると思われる。感情的な行動を制御することができなければ、目的を実現するということも危うくなると思われるからである。

過去の出来事を一般化する能力がなければ、規則を発見するとか正しいやり方を見出すということができなくなる。「正しいやり方」という意味での「正しさ」の「概念」のようなものは、実は相当に早い段階で何らか登場していたと言えるかも知れない。しかし、計画的に行動する能力が発達しない段階では、そのような「概念」は十分に意味を持つとは言えないであろう。計画性を持つようになるというのは、単に未来時制を使いこなせるようになるということではなくて、目的とか目標、あるいは狙いを定める、目的・目標を達成するための手段とか手順を決める、得られる結果・成果とそれを得るために犯す危険の大きさを秤にかけるといったことができるようになるということである。だから、当然のこととして、「正しい」とか「よい」というような言葉が使えるようになるということである。特に、「よい」という語が使えるようになるということが決定的であろう。どうするのが「よい」かが決まれば、結局のところ、問題は何も残らないであろうと思われるからである。そういう意味で、この語が使えるようになるというのは、ほとんど（理性的存在の一員であるという意味で）理性的である言われ得るような者になるというのと同義であると思われる。しかしこれは、明らかに、少し言い過ぎであろうが。

ところで、私たちは感情と理性を対立させるような考え方というものを今日普通にするようになっているが、感情的な行動を制御するということが、はじめから理性的な能力の役割であった、理性的な能力というものはそのためにつくられた、ということではないと思われる。或る場合に感情的な行動を中止するとか控えることが必要であったということは確かであろう。しかし、そういう仕組みをつくることと計画的に行動するということとは、基本的には別のことであって、そういう仕組みをつくることから直ちに計画的に

行動する能力というものが生まれてきたということはないと思われる。別の言い方をすれば、理性的な能力というのは、特に感情をどうにかするために登場してきたものではなくて、未来的なもの、未来に属するもの一般を処理するために登場してきた、そしてそのようなものとして発達してきたと考えるべきであろう。感情的な行動を制御する仕組みは、結果としてこのような未来を処理する能力に組み込まれることになったと考えられる。

人類がアクラシアを経験するようになったのは、このような未来を処理する能力が登場したときからであろう。感情的な行動あるいはそれに類した行動を開始する条件が整っているときに、誰も止めないのに自分でそれをやめるというのは、普通には、そうしない方がよいとかそうすべきでないとかそうしてはならないと思うというそのことからしか生じ得ないことである。しかし、そう思えばそれで十分であるということは、もちろんない。十分ではないから、アクラシアというものがあり得るのである。未来を処理する理性的な能力というものが存在しなければ、アクラシアも存在しないであろう。どうするのがよいかということがそもそも問題にならないというのであれば、自分のしたことを後悔するということもないであろう。後悔することがないのであれば、アクラシアは存在しない。

3　ところで、理性的な能力というものは、人間であれば、誰もが同じように持つものであろうか。仮に同じように持つと言えるとして、その場合「人間であれば」というのは、具体的にはどのような条件であると言えばよいのであろうか(註2)。

ここで問題にしている理性的能力というのは、行動の計画性とか感情的行動の制御とかアクラシアに関わる極めて実践的な能力のことであるが、そういう能力にはもちろん個人間の違いというものがあると言える。計画性がある人もない人もいる。感情的な人もそうでない人もいる。しかし他方で、条件付きでだとは思うが、誰もがそれを同じように持つと言える、そういう理解の仕方がそれについてはあり得ると思われる。

『クリトン』篇でソクラテスは、自分がなぜ牢獄にとどまろうとするのか、その理由をクリトンが理解することを強く望んでいる。周知のように、クリ

トンはソクラテスの古くからの友人であるが、そのことはここでは無視する。読者である私たちもクリトンと同じように理解することを求められていると考えてよいと思われるからある。（ここで問題にしているのはその範囲の話である。）仮にそうだとして、その場合に読者である私たちとクリトンに必要とされる能力というのは、正確に言って何であろうか。私はそれは、普通一般に大人が持つ（つまり、普通一般の大人であれば誰もが持つ）と言えるような、あるいは普通の大人が持つ程度の、理性的能力、そしてそれはクリトンにあって多分子供にはないものであると考える。理性的能力について、このような規定というものはあり得ると思われる。この場合、ソクラテスと私たち、あるいはソクラテスとクリトンの間にあると考えられる違いは全く問題にならないのであるが、私たちと子供（例えば小学生）の間にある違いは決定的に問題になる。小学生（あるいは中学生）の、どのあたりに線を引けばよいか、その点に関しては問題が残る。だが、どこかに引かれるべきであるという点に関しては、恐らくは何も問題がないと思われる。私たちが子供に理解することを求めるのが無理であると判断する場合が、確かにある。しかし、なぜそのように私たちは判断するのであろうか。本当のところ、子供には何が困難であるのか。

Ⅲ．価値の起源

1　ここで私たちは何をどう考えればよいのか、少し立ち止まって考えてみよう。人間であれば誰でも普通に持つと言えるが、それが小学生である場合には、潜在的には持つと言えても、まだ顕在的なものになっていないという意味では持たないと言える、そういう理性的な能力というものの実質は何であるのか。それを考えるための手立ては何かあるのであろうか。

私たちはここで、もう一度太古の昔に帰ってみるのがよいと思う。一部の考古学者によると、現生人類が集団間の交流を持つようになって複雑な社会を構成するようになった時期というのは、今から約４～６万年前である。そして、その時期に人類ははじめて複雑な言語と芸術的シンボルを使用するようになったと彼らは考えている。ネアンデルタール人は同時期に（ヨーロッパでは）現生人類と共存していたが、彼らは集団間の交流も複雑な言語も芸

術も持たなかったとされる。さて、人間の子供をネアンデルタール人に例えるのは（どちらに対しても失礼になるというだけではなくて）間違っていると思われる。人間の子供はそうではないが、ネアンデルタール人は複雑な社会というものを構成する能力を、潜在的にすら持たなかったと最近の考古学者は考えているからである。（私はその説にここでは従うことにする。）ところで、現生人類は4～6万年前に突然現れたのではない。通常は、10～15万年前に東アフリカに現れたとされる。すると、約10万年の間、現生人類には複雑な社会を構成するための準備期間があったということになる。

話はこの通りであるかどうか、それは分からない。しかし、それがいつからであれ、私たちの直接の祖先が（私たちの直接の祖先だけが）或るときから複雑な社会というものを構成するようになった、そしてそれが決定的とも言えるような何かのはじまりであったということはあり得ると思われる。

2　子供に欠けているのは、一言で言えば、社会性である。しかしこれでは、多分正しいとは思うが、余りに漠然とし過ぎているので、もう少し限定しなければならない。具体的にどのようなものとしての、あるいはどのような意味での「社会性」であるのか。

集団間の交流というものが、複雑な社会を構成するような仕方でできるようになるためには何が必要となるかを考えてみよう。当然のことだが、何よりも先ず、自分たちが相手側の言っていること、要求していること、望んでいることを理解すること、またそれとは逆に、自分たちの言っていること、要求していること、望んでいることを相手側に理解してもらうことであろう。そして次に必要になるのは、それぞれの主張と要求、欲求の間で折り合いをつけること、調整すること、あるいは一致点を見出すことであろう。

このような作業は、全体としてはかなり複雑なものになると言えよう。集団間の折り合いをつけることができるということは、集団内部の折り合いをつけるという作業を、多分それと同時並行的に遂行できるということであろう。私たちは成長するとごく普通に、誰もが同じようにうまくできるというのではないが、そういう作業を、例えば自分が中心になってするとか、あるいは集団の一員としてそれに加わることを求められるとかするようになる。

もし万一そういうことが全くできないという場合には、決定的に重大な（恐らくは病的な）欠陥があると判断されることになるか、完全な変人と見なされるか、そのどちらかであろう。

さて、このような、折り合いをつけるという作業は、それぞれの求めるものが違っている場合には、それほど難しいことにはならないかも知れない。交換できる場合には交換すればよいのである。だが、求めるものが同じである場合には、難しいことになるかも知れない。奪い合いになるかも知れない。しかしながら、互いに理解し合う、その上で折り合いをつける、あるいは互いに協力し合うというような作業というものは、それぞれが当面求めるものが同じであっても違っていても、それらを求めることを通して最終的に求めているものが同じものであるということがなければ、そしてそのことを何らか知っているということがなければ、そもそもはじまらないように思われる。一緒にやれる仲間だと思っていたが、求めるものが結局は違っていた、最終的に目指すところが異なっていたと解れば、とても一緒にはやれない、理解し合えないということになるのではないか。それは、最終的に何のためにということが理解し得ないからである。確かに、日常的に、目指すところが違っていて一緒にはやれないとか理解し得ないということがあろう。もしそれが本当に私たちが最終的に求めていることについてあるとしたら、本当に完全に私たちは互いに理解し得ないということになるのではないか。

私たちは最終的には誰もが、生存と繁栄とか、幸福とか、何かそういった絶対的に同じと言えるものを求めているという了解を持っているから、その限りで、互いに折り合いをつけたり、調整したり、協力し合ったりできるということであろうか。そうでない場合、例えばそういう了解が故意に無視されるような場合には、際限なく互いの立場を主張し合うことになるか、どちらかが屈服するか、あるいは妥協するか、そのいずれかであるということになると思われる。妥協するというのは、理解し合った上で折り合いをつける、一致点を見出すということと、同じではないと思われる。政治家とか役人のように（政治家や役人だけではないが）自分の否を絶対に認めようとしない場合には、最後はいつでも、どちらかが屈服するか妥協するかということになる。そういうことになるのは、政治家とか役人というのは多分、自分たち

が住民と同じものを求めているということを認めることになるのを、絶対に避けたいと思うからではないか。同じものを求めているということを認めてしまうと、彼らは自分たちが考えているものが本当に住民のためになるのかとか、それは本当に住民の求めているものであるのかといったことを、本気で問題にしなければならなくなる。それはつまり、本当の意味での公共性の視点に立って、何が有益で何が有害であるのかということをめぐってその真実というものを問題にしなければならなくなるということであろう。妥協するというのは、そういうことが問題になるのを避けることであると思われる。逆に妥協しないというのは、ただ単に屈服しないとか自説を貫くと宣言しているのでないとしたら、ここでそういう事柄をめぐって真実あるいは真理を問題にするという、そういう態度をとるということを宣言することであろう。

私たちは何をするのであっても、歩くのであっても歩くのをやめるのであっても、あるいは他の何をするのであっても、ただ（そのように記述される）そのことをすることだけが目的である、そしてそれだけであるというのではない。必ず、それとは別の何かのためにそういうことをしているのであると、いつでも言える。そして更に、その別の何かというのも、そのときそのときで、あるいは人によってさまざまである、そしてさまざまであるということで話は終わりであるというのではない。そういう「さまざまなもの」が最終的に私たちの求めているものであるというのではなくて、私たちが最終的に求めているのは、誰もが絶対的に同じものを求めていると言えるような、「人間にとっての善」とか何かそういったものであると言うべきであろうか。

ところで、私たちはこういうことを、言われなくても解るというわけにはいかないが、言われれば恐らくは解る。（この節で言ったことの、まさか全部ということはないと思うが、部分的には間違っているかも知れない。しかしそれも、その理由と一緒に言われれば、多分間違っていると解るであろう。）このように、言われれば解るようになるために、何か特別な能力とか訓練が必要であるということはないと思われる。こういう文章になれていない人でも、ほんの少し時間をかければ、あるいは口頭で説明すれば、それほど難しいとは思わないであろう。これが、人間であれば誰でも普通に持つと言える（しかし、子供は持たないと思われる）理性的な能力というものの実質であ

ると私は考える。それは、或る視点からすれば集団間の利害を調節するために発達してきた能力であると言えるが、正確に言えば、それはあらゆる意味で利害とか善悪に関わる能力のことである。そういう能力を私たちが持つようになったということは、特に不思議なことではないであろう。

3　最後に、私たちは誰もが絶対的に同じものを求めているということと、私たちがそのように求めているものをめぐって真理とか真実ということが何らか問題になるということについて、ここでの考察の締めくくりとして若干のことを付け加えたい。

真理とか真実が何らか問題になるというのは、或る意味ではひどく簡単なことである。というのも、私たちは最終的に幻影とか幻想の類い、あるいは単にそう思われればよいということを求めているのではないということ、このことは完全にはっきりしているように思われるからである。他の事柄に関してはともかく、このことに関しては、私たちはそう思われることを求めているのである、単にそう思われさえすればそれでよいのであって、実際にそうであるかどうかは問題ではないのだ、とするわけにはいかないであろう。ここに、他のところでは決してはじまらないと言えるような、何かのはじまりがあることは間違いがないと思われる。そしてそれは、恐らくは、最も広い意味での反省的思考のはじまるところであると言ってもよいのではないか。とにかくそういうことが、人類の歴史上、どこかではじまったということは間違いのないことであろう。そういうことがはじまる場所として、真理と善の問題がはじまるところほどふさわしい場所はないであろう。

ではなぜ、そういう問題がはじまる場所は、個人の次元にではなくて、本当の意味での（と上で言った）公共性の次元にあったのか。言い換えれば、前節で言った「絶対的に同じもの」というのが、なぜ私たちの議論に登場しなければならなかったのか。

それは、真理と善の問題というのは、個人的な直観（そこでは何かが見えたとか見えるということだけが問題である）、あるいは個人的な思想（この場合には自分はこう思うということだけが問題である）の次元にあるような問題では絶対にないからであろう。人は場合によってはそういうものに執着

するが、そういう個人的なものというのは、この問題にとってはほとんど意味のないものであろう。しかし、そういうものからしかはじめられないから、話はやっかいなものになるのである。だが、そういうものに執着している限りは、実際には何もはじまらないであろう。

私たちがこの問題について考えようとするとき、私たちは否応なく「公共性の次元」に身を置くことになる。しかしそれは、「公共の善」と言われるようなものについて考えるべきであるというようなことでは、全くない。それはむしろ、私たちがこの場合に考えること、言うことは、すべて完全に他人に理解されなくてはならない、そしてそれは実際に他人に理解され得るということである。

私たちがこの場合に考えることとか言うことは、すべて「理由」としてひとくくりにされるようなものであろう。理由というのは、それが正当なものである場合には、普通の意味で理性的な能力を持つ人に、完全に理解されるものでなくてはならない。そういうものであるはずである。もし私たちが同じものを求めているということが、そもそものはじめから全くなかったのであれば、このような公共性の次元というものも、恐らくははじめから開かれることが全くなかったであろう。

このような理性的能力というものが、個人的な事柄が問題になる次元で発達したのではなかった（私はここではそう考えたのであるが）ということは、大いにありそうなことであろう。それにしても、理性の起源と善の起源に関する話は、感情の起源に関する話とは余りにも違い過ぎる。二つの話を一元化するというようなことは、とてもできそうにないと思われる。恐らくは、一元化しようとすること自体が誤りなのであろう。そして要するに、それが価値の多元性ということなのであると思われる。しかしもしそうだとすると、私たちは「価値」という語を、余りにも出自とか氏素性が異なるものに、ひどく無神経な仕方で無差別に用いているということになる。

註

(註1)「実体の変容」という言い方はP.Griceから借用した。P.Grice, *The Conception of Value*, Oxford: Oxford University Press, 1991, pp.81-7参照。当初、私がここで試みようとしたのは、彼のこの講義録と最近出版されたもう一つの講義録（P.Grice, *Aspects of Reason*, Oxford: Oxford University Press, 2001）を標的とする、実在論的価値論の可能性をめぐる議論の全体を締めくくる最後の議論の輪郭を、（結論がどうなるのか見当をつけるために、あらすじだけでも）素描することであった。しかし、実際に私にできたのは、Griceを論じるための準備作業でしかなかった。私の周辺事情は、Griceを論じるのにふさわしいものとは、今はとうてい言えない。

(註2)　この点に関わるGriceの議論は、極めて精緻である。P.Grice, *Aspects of Reason*, pp.28-36参照。今のところ私は、このような意味での理性的能力をめぐる問題が「実在論的価値論の可能性をめぐる議論の全体を締めくくる最後の議論」の中心に来ることになるのではないかと思っている。